

その他の無脊椎動物

- | | | |
|---|----------------------|--------|
| 1 | アメリカザリガニ | 被害甚大種 |
| 2 | ウチダザリガニ(タンカイザリガニを含む) | 要注目種 |
| 3 | カワリヌマエビ属の数種(数亜種) | 準被害危惧種 |
| 4 | フロリダマミズヨコエビ | 準被害危惧種 |
| 5 | トウナンアジアウズムシ | 準被害危惧種 |
| 6 | アメリカナミウズムシ | 準被害危惧種 |
| 7 | アメリカツノウズムシ | 準被害危惧種 |

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	アメリカザリガニ	学名	<i>Cambarus clarkii</i>	目科名	軟甲綱・十脚目アメリカザリガニ科
	カテゴリー (2019)	被害甚大種	タイプ (2019)	Aa	国リスト カテゴリー	条件付特定外来生物緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	被害甚大種	タイプ (2005)	Aa	原産地	北米
	導入・侵入年代	1927年	導入・侵入原因	ウシガエルの餌として導入された		
②分布範囲	全国	北海道を除く日本各地に定着。北海道でも数カ所の温泉排水などで生息が確認されている。				
	府内	府内全域の河川、湖沼、ため池、水路、水田などに定着していると考えられる				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input checked="" type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響、 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 被害が大きい、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	全長8cm程度で、成体は赤と黒の派手な体色。5対の歩脚を有し、第1脚は大きなはさみとなっている。比較的温暖な湿地に生息し、雑食性。低い溶存酸素にも耐えることが可能。6月から9月までの繁殖期に数百個の卵を産む。卵期とふ化後の幼生期は母親の腹脚の間で保護される。体長8mmなった稚エビは、親と同じ底生生活を開始し、通常は2年で繁殖を開始する。					
⑤近似種との見分方	アメリカザリガニの幼生は、赤褐色で体形がずんぐりしているためニホンザリガニ <i>Cambaroides japonicus</i> に誤認されることもあるが、ニホンザリガニは、北海道・東北に分布し、京都府には分布していない。					
⑥被害状況	河川、湖沼、ため池、水路、水田などで水生小動物や水生植物に対する食害が知られている。また、イネの根の食害のほか、田の畦や用排水水路の土手に穴をあけるなどの農業被害も見られる。ニホンザリガニとの競合によりニホンザリガニが減少したという説もあるが、真偽は定かではない。					
⑦必要な防除対策	ウシガエルとオオクチバスがアメリカザリガニの捕食者として知られている。このため、湖沼やため池などの水域生態系において、ウシガエルやオオクチバスの駆除を不用意に実施すると、アメリカザリガニが増加することによって、水生植物群落やそれに依存するトンボ等水生昆虫類が壊滅するといった二次的被害を引き起こす恐れがある。こうした事態を避けるためには、アメリカザリガニの個体群をモニタリングし抑制策を講じるような生態系管理が必要である。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	自然環境センター編著（2008）日本の外来生物. pp.480. 平凡社. Maezono, Y., Kobayashi, R., Kusahara, M. and Miyashita, T. (2005) Direct and Indirect effects of Exotic Bass and Bluegill on Exotic and Native Organisms in Farm Ponds. Ecological Applications. 15(2): 638-650. 京都府（2002）京都府レッドデータブック. 京都府. 日本生態学会（2002）外来種ハンドブック. 地人書館. 西野麻知子（編）（1993）びわ湖の底生動物Ⅲ. 滋賀県琵琶湖研究所. 武田正倫（1982）原色甲殻類検索図鑑. 北隆館、東京. 伴 浩治（1980）アメリカザリガニ-侵略成功の鍵. pp.37-43. 川合禎次・川那部浩哉・水野信彦（編）. 日本の淡水生物-侵略と攪乱の生態学. 東海大学出版会. 上田常一（1970）日本淡水エビ類の研究（改訂増補版）. 園山書店.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input checked="" type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input checked="" type="checkbox"/> 条件付特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）					

（執筆者） 竹門康弘



神戸の自然シリーズより

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	ウチダザリガニ (タンカイザリガニを含む)	学名	<i>Pacifastacus leniusculus</i>	目科名	軟甲綱・十脚目ザリガニ科
	カテゴリー (2019)	要注目種	タイプ (2019)	Dc	国リスト カテゴリー	緊急対策外来種
	カテゴリー (2005)	要注目種	タイプ (2005)	Dc	原産地	北米北西部
	導入・侵入年代	1926年	導入・侵入原因	水産資源として北海道に導入された		
②分布範囲	全国	ウチダザリガニ (P. l. trowbridgii) が北海道、福島県などに定着。滋賀県に定着しているタンカイザリガニ (P. l. leniusculus) はウチダザリガニの亜種とされていたが、現在は同種とされている。				
	府内	府内では確認されていない。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響、 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	体長が15cmを超える。大型のザリガニであり、国内では最大級の水生底生動物である。第1胸脚に白い模様が発生することから、英名ではSignal Crayfish (シグナルクレイフィッシュ) として総称されている。繁殖能力が強い。魚類、底生生物、水草などを捕食する。水草を切断し減少させる。高温や汽水環境に耐性があり、さまざまな水域に生息できる。					
⑤近似種との見分方	ウチダザリガニ (タンカイザリガニ) は、第1胸脚に白い模様があることで他種と区別できる。					
⑥被害状況	北海道では、ニホンザリガニ (環境省レッドデータブック：絶滅危惧Ⅱ類) と巣穴を巡る競合が懸念されている。他の小動物を捕食して生態系を攪乱している可能性が高い。イギリスでは捕食と隠れ場所をめぐる競合により、在来底生魚類に影響を与えている。府内への定着は確認されていないが、繁殖能力が強く、高温や汽水環境にも耐性があることから、さまざまな水域に生息できるので注意が必要である。永着すると、魚類、底生生物、水生植物などを捕食し減少させる恐れがある。					
⑦必要な防除対策	ペットとして売買されてきた経緯があり、野外に人為的に放逐されることのないよう啓蒙や監視が必要。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	自然環境センター編著 (2008) 日本の外来生物. pp.480. 平凡社. Nakata, K. and S. Goshima (2006) Asymmetry in mutual predation between the endangered Japanese native crayfish <i>Cambaroides japonicus</i> and the north American invasive crayfish <i>Pacifastacus leniusculus</i> : a possible reason for species replacement. <i>Journal of Crustacean Biology</i> , 26: 134-140. Lewis, S.D. (2002) <i>Pacifastacus</i> . In: Holdich, D.M. ed., <i>Biology of freshwater crayfish</i> . PP.511-540. Blackwell Science Ltd. Oxford. 川井唯史ほか (2002) 日本における北米産ザリガニ類 (タンカイザリガニとウチダザリガニ) の分類および移入状況に関する考察。青森県自然誌研究7: 59-71. 日本生態学会 (2002) 外来種ハンドブック. 地人書館. 西野麻知子 (編) (1993) びわ湖の底生動物Ⅲ. 滋賀県琵琶湖研究所. 武田正倫 (1982) 原色甲殻類検索図鑑. 北隆館、東京.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物 (外来生物法)、 <input type="checkbox"/> 緊急性 (侵入初期等)					
				提供 財団法人 自然環境研究センター		(執筆者) 竹門康弘
						

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	カワリヌマエビ属 種群	学名	<i>Neocaridina</i> spp.	目科名	軟甲綱・十脚目ヌマエビ科
	カテゴリー (2019)	準被害危惧種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	準被害危惧種	タイプ (2005)	Ba	原産地	中国
	導入・侵入年代	1990年代以降継続	導入・侵入原因	ペットや釣り餌としての生きた個体の輸入が行なわれた		
②分布範囲	全国	北海道，宮城，滋賀県，京都府，大阪府，兵庫県，千葉県，神奈川県				
	府内	京都市深泥池，鴨川，木津川， 深泥池では在来のヌマエビが絶滅し本種に置き換わってしまった。				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	近縁の在来種であるヌマエビ <i>Paratya compressa compressa</i> の幼生は浮遊生活期を持つのに対し、カワリヌマエビ属 <i>Neocaridina</i> は卵から孵化後直ちに着床生活に入る。このため、プランクトン生活に適さない水槽内のような狭い水体でも繁殖させることができる。緑色，こげ茶色，淡灰色，透明，黒色の条紋，菱形の黄土色斑紋など体色に多様な個体変異が見られる。陸上に揚げてもザリガニのような姿勢で歩行する。					
⑤近似種との見分方	日本のカワリヌマエビ属には、在来種のミナミヌマエビ <i>Neocaridina denticulata denticulata</i> の他に、外来種としてツノナガカワリヌマエビ亜種群 <i>Neocaridina denticulata</i> subspecies complexやシナヌマエビ <i>Neocaridina denticulata sinensis</i> が知られているが、これら以外にも韓国・中国に分布する6亜種以上のうち複数亜種が輸入されている可能性が高い。シナヌマエビ在来のミナミヌマエビに比べて額角が短い，ツノカワリヌマエビは比較的長い額角をもつ。亜種レベルでの形態的な違いは微妙であり，正確な同定は困難を極める。					
⑥被害状況	京都市深泥池では，1999-2000年時点までに在来のヌマエビが絶滅し，ツノナガカワリヌマエビに入れ替わってしまった。その原因として，ヌマエビの幼生が浮遊生活期を持ち，ブルーギル等の捕食圧を受けやすいのに対し，ツノナガカワリヌマエビは，卵から孵化後直ちに着床生活に入るため，捕食をされにくいことが考えられる。プランクトン生活に適さないような狭い水域でも増殖できるので，アクアリストに水槽の掃除人として人気がある。その結果，全国各地から複数の亜種が移入され遺伝的汚染が懸念される。					
⑦必要な防除対策	中国から釣り餌（ブツエビの名称で売られている）や水槽のペット（ミナミヌマエビやカワリヌマエビの名称で売られている）として輸入されている。生きた個体の輸入の規制や釣り餌の野外への放逐を禁止する啓蒙等などが考えられる。既に侵入した個体群の防除は困難。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	Keisuke Onuki, Yusuke Fuke (2022) Rediscovery of a native freshwater shrimp, <i>Neocaridina denticulata</i> , and expansion of an invasive species in and around Lake Biwa, Japan: genetic and morphological approach. <i>Conservation Genetics</i> , 23(5), 967-980. Nakai K, Kaneko Y (2020) Non-indigenous species in and around Lake Biwa. In: Kawanabe H, Nishino M, Maehata M (eds) <i>Lake Biwa: Interactions between Nature and People</i> . Springer, Cham, pp 299-312. Nishino M (2017) Invasion of alien freshwater shrimps, <i>Neocaridina</i> spp., into Japan and taxonomic problem of the genus. <i>Bull Kansai Organ Nat Conserv</i> 39: 21-28. 丹羽信彰 (2010) 外来輸入エビ、カワリヌマエビ属エビ (<i>Neocaridina</i> spp.) および <i>Palaemonidae</i> spp. の輸入実態と国内の流通ルート. <i>CANCER</i> 19: 75-80. 西野麻知子・丹羽信彰 (2004) 新たに琵琶湖へ侵入したshナヌマエビ? (予報) <i>オウミア</i> 80: 3. 丹羽信彰 (2001) ミナミヌマエビの個体群生態. <i>海洋</i> 号外26: 125-130.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）					



ツノナガカワリヌマエビの府内分布（2006年時点）



(執筆者) 竹門康弘・西野麻知子



京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	フロリダマミズヨコエビ	学名	<i>Crangonyx floridanus</i>	目科名	軟甲綱・端脚目マミズヨコエビ科	
	カテゴリー (2019)	準被害危惧種	タイプ (2019)	Ba	国リストカテゴリー	その他の総合対策外来種	
	カテゴリー (2005)	準被害危惧種	タイプ (2005)	Ba	原産地	北米のフロリダ	
	導入・侵入年代	1999年に初記録		導入・侵入原因	観賞魚や水草の輸入販売ルート		
②分布範囲	全国	本州の関東、中部、近畿、中国地方ならびに九州北部					
	府内	賀茂川下流域、宇治川の全域、木津川下流域					
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性						
④生態的特性	日本では1989年に千葉県我孫子市古利根沼で最初に見つかった。その後、横浜市の境川で1999年と2002年、鶴見川及び帷子川では2002年、川崎市の多摩川で2002年に生息が確認された。京都府内では、2002-3年に宇治川で定着が確認され、2006年時点では宇治川全域に高密度で生息していた。フロリダマミズヨコエビの侵入経路として、アクアリウムの水草や砂利等とともに廃棄されて広まった可能性が考えられる。フロリダマミズヨコエビは、25℃を越える高温条件下でも生息し、年中繁殖を行なう。また、河川や湖沼の岩盤、礫底、砂底、水生植物などの表面を活発に動き回る生活様式を示し、微生物場条件を選ばない特性がある。このため、在来のヨコエビ類は生息しない都市河川や護岸された水路にも分布している。						
⑤近似種との見分方	在来のヨコエビ類であるヨコエビ属 <i>Gammarus</i> やキタヨコエビ属 <i>Jesogammarus</i> では、第1触角の第2節には明瞭な3節の副枝があるが、フロリダマミズヨコエビの副枝は2節で小さいことから区別できる。その他に、肉眼的特徴として、フロリダマミズヨコエビが体長1 cm程度で比較的小さいこと、体色が淡く白っぽく見えること、複眼が比較的大きく目立つこと、そして陸上に掲げても身体を立てて活発に歩き回ることなどが挙げられる。						
⑥被害状況	日本産の淡水性ヨコエビ類は湧水や岩清水のような清冽な水域に限定的に生息しているため、貧栄養で清冽な水質の指標生物として用いられてきた。このためヨコエビが河川の底生動物群集中に卓越するとその調査地は貧腐水性の水質条件であると判定される。ところが、本種は日本産の淡水性ヨコエビ類が生息できない高水温環境下でも生息し、しかも在来種との区別が容易ではないため、生物指標による水質判定にとって大きな支障となる。また、生息域ではきわめて高密度となるため、ヒラタカゲロウ科などのように石表面に生息する水生昆虫類と餌資源や生息空間を巡る競争排他を引き起こす恐れがある。						
⑦必要な防除対策	一旦侵入を許すと防除は困難。熱帯魚や水草の輸入販売ルートを通じて広がっていると考えられるので、アクアリウムに用いるペットや観賞用水草を野外に捨てないキャンペーンやアクアリウムの掃除の際に流しや排水溝に直接捨てないことをアクアリストのマナーとして定着させる必要がある。また、熱帯魚や水草のむやみな輸入を慎むように制度の改革が求められる。						
⑧改訂の理由	-						
⑨参考文献	Baars, J.-R., Minchin, D., Feeley, H. B., Brekkhus, S., Mauvisseau, Q. 2021. The first record of the invasive alien freshwater amphipod <i>Crangonyx floridanus</i> (Bousfield, 1963) (Crustacea: Amphipoda) in two Irish river systems. <i>BiolInvasions Records</i> , 10: 629-635. 石川俊之・木下智晴・山本賢樹 (2017) 琵琶湖において同所的に生息するナリタヨコエビ (<i>Jesogammarus naritai</i>) とフロリダマミズヨコエビ (<i>Crangonyx floridanus</i>) に対するブルーギル (<i>Lepomis macrochirus</i>) による捕食圧の違い. 滋賀大学環境総合研究センター研究年報 14: 51-55. 富川光・森野浩 (2012) 日本産淡水ヨコエビ類の分類と見分け方. <i>日本動物分類学会誌</i> 32: 39-51. Nagakubo et al. (2011) Rapid expansion of the distributional range and the population genetic structure of the freshwater amphipod <i>Crangonyx floridanus</i> in Japan. <i>Limnology</i> 12: 75-82. 田中吉輝・長久保麻子・東城幸治 (2010) 外来種フロリダマミズヨコエビと在来種オオエソヨコエビが混棲する長野県安曇野市蓼川における両種の個体群動態. <i>陸水学雑誌</i> 71: 129-146. 金田彰二・倉西良一・佐竹潔・石綿進一・清水高男・平良裕之 (2007) 多摩川に侵入したフロリダマミズヨコエビの微生物環境および消長. <i>日本生態学会第54回全国大会講演要旨</i> C3-03. MORINO, H., H. KUSANO & J. R. HOLSINGER (2004) Description and distribution of <i>Crangonyx floridanus</i> (Crustacea: Amphipoda: Crangonyctidae) in Japan, an introduced freshwater amphipod from North America. <i>Contributions of the Biological Laboratory, Kyoto University</i> 29:371-381. 梶一成・若山朝子・吉田謙一 (2003) 川崎市内におけるヨコエビ類の分布. <i>川崎市公害研究所年報</i> 30: 39-44.						
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）						
						(執筆者) 竹門康弘	
京都府宇治川産フロリダマミズヨコエビ (2006年5月竹門撮影)							

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	トウナンアジアウズムシ	学名	<i>Dugesia austroasiatica</i>	目科名	ウズムシ綱・三岐腸 亜目サンカクアタマ ウズムシ科
	カテゴリー (2019)	準被害危惧種	タイプ (2019)	Ba	国リスト カテゴリー	-
	カテゴリー (2005)	準被害危惧種	タイプ (2005)	Ba	原産地	東南アジア
	導入・侵入年代	1968年に初記録	導入・侵入原因	観賞魚や水草の輸入販売ルート		
②分布範囲	全国	本州の北陸、関東、近畿地方ならびに九州北部				
	府内	深泥池				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input checked="" type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	同属の在来種が低温で貧栄養な清冽な水域に生息するのに対して、本種ならびにアメリカナミウズムシは、高温で中腐水性の池や都市河川にも生息できる。京都市深泥池では、1970年代には、在来種の <i>Dugesia japonica</i> が山水の流れ込み付近にのみ生息していたが、1998年以降の調査では、アメリカナミウズムシが池の開水面岸際全域で採集されている。主に石の下面をゆっくりと匍匐している。繁殖や成長などの生活史特性は不明。					
⑤近似種との見分方	外見での判断は容易ではないが、在来のナミウズムシの成体が20-30mmに達するのに対して、本種の成体の体長は10-12mmと小さい。また、ナミウズムシの体表面の地色が単調な灰褐色であるに対して、本種は薄い茶色で細かい白斑があることが多い。本種の頭部の三角形の角の張り出しは弱く丸いことが多いが、ナミウズムシの体形の変異の範囲。					
⑥被害状況	在来のナミウズムシと競合するかどうかは不明であるが、在来種が低温で貧栄養な清冽な水域に生息することから貧腐水性の指標種として利用されているが、本種は高温で中腐水性の池や都市河川にも生息できるため、本種の侵入によって厳密に同定をしないと生物学的水質判定に弊害を生じることになる。調査が不十分であるため、現在の分布状況や生物学的水質判定における被害状況は不明。各地の湖沼河川に広がっている恐れがある。また、セリ、クレッソン、エンサイといった水生作物に付着したまま出荷されると衛生的な被害を引き起こす恐れがある。					
⑦必要な防除対策	一旦侵入を許すと防除は困難。熱帯魚や水草の輸入販売ルートを通じて広がっていると考えられるので、アクアリウムに用いるペットや観賞用水草を野外に捨てないキャンペーンやアクアリウムの掃除の際に流しや排水溝に直接捨てないことをアクアリウムのマナーとして定着させる必要がある。また、熱帯魚や水草のむやみな輸入を慎むように制度の改革が求められる。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	川勝 正治等（2008）日本の平地水域のプラナリア類— 在来種と外来種の手引き. http:// victorriver.com/ Documents/mw_j.pdf 川勝 正治・西野 麻知子・大高 明史（2007）プラナリア類の外来種. 陸水学雑誌 68: 461-469. Kawakatsu et al.（1986） Kawakatsu et al.（1985）					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）					

トウナンアジアウズムシの府内分布（2006年現在）



（執筆者）

竹門康弘・西野麻知子・川勝正治

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	アメリカナミウズムシ	学名	<i>Girardia tigrina</i>	目科名	ウズムシ綱・三岐腸亜目サンカクアタマウズムシ科
	カテゴリー(2019)	準被害危惧種	タイプ(2019)	Ba	国リストカテゴリー	-
	カテゴリー(2005)	準被害危惧種	タイプ(2005)	Ba	原産地	北米
	導入・侵入年代	1985年に初記録		導入・侵入原因	観賞魚や水草の輸入販売ルート	
②分布範囲	全国	本州の関東、中部、近畿、中国地方ならびに九州北部				
	府内	賀茂川下流域、桂川下流域、東高瀬川、宇治川下流域、木津川下流域				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	同属の在来種が低温で貧栄養な清潔な水域に生息するのに対して、本種、アメリカナミウズムシ、ドウナンアジアウズムシは、高温で中腐水性の湖沼や都市河川にも生息できる。鴨川流域の市街地域とくに四条よりも下流域に大量に生息しており、河床の石をめくると下面を匍匐する個体を観察できる。繁殖や成長などの生活史特性は不明だが、体色が餌により変化するため、緑色の淡水海綿を食べたと思われる個体は緑色を呈する。					
⑤近似種との見分方	外見での判断は容易ではないが、在来のナミウズムシの成体が20-30mmに達するのに対して、本種の成体の体長は8-10mmと小さい。また、ナミウズムシの体表面の地色が単調な灰褐色であるに対して、本種は薄い白色に焦げ茶色の斑点を生じる。ただし、体色には生態変異が大きく、地色が薄茶で白斑がある個体や、緑色、赤色、紫色に淡色斑の個体もみられる。本種の頭部の三角形の角の張り出しは比較的強く、ナミウズムシよりも先端が尖る傾向がある。また、標本にすると体表面の斑紋は薄れるが、 <input type="checkbox"/> 器の壁面には褐色の斑点が明瞭に残ることによって区別できる。					
⑥被害状況	本種は世界各地に拡散している。日本では1985年に鹿児島県下のオーストラリア産ザリガニの養殖場で最初に発見された。在来のナミウズムシと競合するかどうかは不明であるが、在来種が低温で貧栄養な清潔な水域に生息することから貧腐水性の指標種として利用されているが、本種は高温で中腐水性の池や都市河川にも生息できるため、本種の侵入によってしっかりと同定をしないと生物学的水質判定に弊害を生じることになる。各地の湖沼河川に広がっている恐れがある。とくに個体数の多い河川では石の下面に多数個体が群れる結果、石表面に粘液が厚く付着しヒラタカゲロウ科などの水生昆虫が歩行困難になる恐れがある。また、セリ、クレッソン、エンサイといった水生作物に付着したまま出荷されると衛生的な被害を引き起こす恐れがある。					
⑦必要な防除対策	一旦侵入を許すと防除は困難。熱帯魚や水草の輸入販売ルートを通じて広がっていると考えられるので、アクアリウムに用いるペットや観賞用水草を野外に捨てないキャンペーンやアクアリウムの掃除の際に流しや排水溝に直接捨てないことをアクアリストのマナーとして定着させる必要がある。また、熱帯魚や水草のむやみな輸入を慎むように制度の改革が求められる。					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	Sluys R, Kawakatsu M, Yamamoto K (2010) Exotic freshwater planarians currently known from Japan. <i>Belgian Journal of Zoology</i> 140: 103-109. 川勝 正治等 (2008) 日本の平地水域のプラナリア類— 在来種と外来種の手引き. http://victoriver.com/Documents/mw_j.pdf 川勝 正治・西野 麻知子・大高 明史 (2007) プラナリア類の外来種. <i>陸水学雑誌</i> 68: 461-469. 西野麻知子・大高 明史・川勝 正治 (2002) 琵琶湖であらたに見つかったアメリカナミウズムシ. <i>オウミア</i> 75: 4. Kawakatsu M, Takai M, Oki I, Tamura S & Aoyagi M (1986) A note on an introduced species of freshwater planarian, <i>Dugesia austroasiatica</i> Kawakatsu, 1985, collected from culture ponds of <i>Tirapia mossambica</i> in Saga City, Kyushu, Japan. (<i>Turbellaria</i> , <i>Tricladida</i> , <i>Paludicola</i>). <i>Bull. Fuji Women's College</i> 24, Ser. II: 87-94. Kawakatsu M, Oki I, Tamura S & Yamayoshi T (1985) Reexamination of freshwater planarians found in tanks of tropical fishes in Japan, with a description of a new species, <i>Dugesia austroasiatica</i> sp. nov. (<i>Turbellaria</i> : <i>Tricladida</i> : <i>Paludicola</i>). <i>Bull. Biogeogr. Soc. Japan</i> 40: 1-19. Tamura S, Oki I, Kawakatsu M, Ninagawa M, Matsusato T. & Suzuki H (1985) A note on an introduced species of freshwater planarian <i>Dugesia tigrina</i> (Girard, 1850) found in culture ponds of Australian crayfish in Kagoshima Prefecture, Japan. <i>Bull. Fuji Women's Coll.</i> 23, Ser. II: 133-137.					
⑩特記事項 ※該当にチェック	<input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）					
				(執筆者) 竹門康弘・西野麻知子・川勝正治		
京都府京田辺市木津川で発見したアメリカナミウズムシの生体写真(2006年5月竹門)						

京都府外来生物データブック（種別個票）

①基礎データ	種名	アメリカツノウズムシ	学名	<i>Girardia dorotocephala</i>	目科名	ウズムシ綱・三岐腸亜目サンカクアタマウズムシ科
	カテゴリー(2019)	準被害危惧種	タイプ(2019)	Ba	国リストカテゴリー	-
	カテゴリー(2005)	準被害危惧種	タイプ(2005)	Ba	原産地	北米
	導入・侵入年代	1985年に初記録	導入・侵入原因	観賞魚や水草の輸入販売ルート		
②分布範囲	全国	本州の関東、中部、近畿、中国地方ならびに九州北部				
	府内	賀茂川下流域、桂川下流域、東高瀬川、宇治川下流域、木津川下流域				
③選定理由 ※該当にチェック	[被害対象] <input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害、 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害、 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害、 <input type="checkbox"/> 生活被害 [影響内容] <input type="checkbox"/> 上位捕食者となる、 <input type="checkbox"/> 植生への影響、 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐、 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱、 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介、 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱、 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響 [性質特性] <input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い、 <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い [被害程度] <input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い、 <input type="checkbox"/> 被害が大きさ、 <input type="checkbox"/> 特殊性、 <input type="checkbox"/> 回復困難性					
④生態的特性	同属の在来種が低温で貧栄養な清冽な水域に生息するのに対して、本種とアメリカナミウズムシは、高温で					
⑤近似種との見分方	在来のナミウズムシの成体が20-30mmに達するのに対して、本種やアメリカナミウズムシの成体の体長は					
⑥被害状況	本種はアメリカナミウズムシと同様に、高温で中腐水性の池や都市河川にも生息できるため、貧腐水性の指					
⑦必要な防除対策	-					
⑧改訂の理由	-					
⑨参考文献	American Freshwater Planarian Species Now Naturalized in Japan: <i>Girardia tigrina</i> (Girard, 1850) and <i>Girardia dorotocephala</i> (Woodworth, 1897). In "Connection with the Field Survey of Benthic Invertebrates" Kawakatsu's Web Library on Planarians. Sluys R, Kawakatsu M, Yamamoto K (2010) Exotic freshwater planarians currently known from Japan. <i>Belgian Journal of Zoology</i> 140: 103-109. 川勝 正治等 (2008) 日本の平地水域のプラナリア類— 在来種と外来種の手引き. http:// victorriver.com/ Documents/mw_j.pdf 川勝 正治・西野 麻知子・大高 明史 (2007) プラナリア類の外来種. <i>陸水学雑誌</i> 68: 461-469. <input type="checkbox"/> IUCNワースト100、 <input type="checkbox"/> 日本生態学会ワースト100、 <input type="checkbox"/> 魚類学会、 <input type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）、 <input type="checkbox"/> 緊急性（侵入初期等）					
⑩特記事項 ※該当にチェック						

(執筆者) 竹門康弘

